

# いかにして「コスパのよい」学び方を学ぶか

角南 北斗\*

Email: hello@shokuto.com

\*1: フリーランス (ウェブデザイナー)

◎Key Words オンライン授業, オンデマンド, 学習デザイン

---

## 1. 教室に縛られない授業運営

新型コロナウイルス (COVID-19) 感染症拡大の影響を受け、発表者の大学での授業も、2020年度前期はすべて強制的にフルリモート実施となった。同年度後期からは、一部の授業は教室で実施・自宅で受講する学生にも対応せよ (=ハイブリッド式) と求められたり、講義系科目は原則オンデマンド式で行うことと定められたりと、状況に応じた授業の実施形態を取るよう迫られた。

発表者は、情報、デザイン、プレゼンテーション、知財といった内容の授業を担当しており、講義が中心のものもあれば、ドキュメント作成などの演習が中心のものもある。しかし、すべての授業で「教師による説明要素は文書化して配布し、受講生とのやり取りはチャットツールで行う」という授業方式をフルリモート時に採用し、教室実施に移行した授業もその基本方針は変えていない。

そのようにしている理由は大きく2つある。1つは、どの授業方式でも基本的に同じリソースで対応できるという、教師側の準備コスト面のメリットである。もう1つは、受講生が取り組むスピードには大きな個人差があることをフルリモート実施時に改めて実感し、極力「受講生全員の足並みを揃えるような教師主導の進行」を減らした方が良く考えたことである。毎週の授業では、理解度確認のチェックポイントとしてタスクをいくつか設定し、周囲よりも早く終えた学生を不必要に拘束しないようにしている。教師はサポートがより必要な受講生に優先的にリソースを割く、という方針である。

災い転じて福となす、ではないが、コロナ禍によるフルリモート授業で得られた「教室以外での学びかた」に関する知見を、大学も教師も学習者も積極的に活かしていくべきだと発表者は考える。フルリモート時は、学習環境が思うように整わない

なかでも「自分がしっかり学ぶことを最優先に、場所や時間や人のリソースを選択する」よう、教師として繰り返し伝えてきた。多くの受講生がそれを自分なりに実行していることが感じられ、担当教師としての手応えも得ている。

## 2. 自由の裏返しとして求められる自己管理

その一方で、用意されたリソースを活用せず、授業内容の理解が不十分な成果物を締切間際に提出することを毎週のように繰り返す、という受講生も一定数存在する。時間や労力をかけずに単位を得たいというのは、発表者が学生時代にも「要領よく」という言葉で語られていた受講姿勢であるし、今風の言葉で表現するなら「コスパよく」というところだろうか。

もちろんそうした受講生には、提出物の質として不十分であることを伝えはするのだが、特にオンデマンド式の授業ではメッセージを送るようなアプローチしかできず、受講生の反応を得られないことも多い。受講生とコミュニケーションを取りながら (お互いに) 軌道修正する機会という面で、場所や時間を「強制的に」共有する教室の存在は改めて大きいと感じる。

こうした学生は一般に「学ぶ意欲がない」のであり、昔から一定数いたではないか、と言われれば確かにそうであろう。ただ、大学生活全体で見えた場合、昔よりもずっと自己管理能力が問われるような環境になっていることは、もっと議論されてしかるべきではないだろうか。

以前なら、極端な言い方をすれば「決められた時間にとりあえず教室に行く」ことだけで、そこには目的を同じくする学生や教師がいて、学びの流れにも乗りやすかった。時間も場所も学び方も固定的だったため、そこで「コスパよく」立ち回りたくとも、実際の選択肢は限られていた。

それが現在は、オンライン上の様々な情報を自分からアクセスして取得し、整理して管理することが求められる。情報が公開されているメディアは必ずしも使いやすいとは言えない場合も多く、情報を取得するためのICTについても、その環境やスキルが十分でないといふことを知るにも大変である。

特にオンデマンド式の授業では、基本的に参加者が場所や時間を共有しないため、問題を抱えていても他の人に察してもらおうことが期待しにくい。そのことを理解して、自分からアクションを起こしてサポートを得るような振る舞いが求められるが、そもそもそうしたことが苦手な学生も一定数いるわけで、それが学習意欲の低下に拍車をかけている実態があるのではないだろうか。

時間や場所の（実質的な）選択の自由度が増したことで、うまくいけば「コスパよく」立ち回れる部分はあるだろう。発表者の担当授業でも、そうした立ち回りができる受講生は（クラスのうち数パーセントではあるが）いて、そのような受講生を不合理なルールで縛らないよう、担当教師としても意識している。

難しいのは、授業内容の理解が不十分だったり、指示の見落としや勘違いがあったりするような取り組みにも関わらず、目先の時間効率を優先してしまうタイプの学生への対応である。もちろん機会があるごとに指摘はするのであるが、自分の理解度や状況をモニタリングする意識が薄いと、自分だけが厳しく指摘されているように捉えられかねない、という心配もある。

### 3. 授業の安易なオンデマンド化の弊害

発表者が関わる大学の最近の方針は「講義型の授業はオンライン実施、原則オンデマンド式で」というものだ。教室実施の授業の前後にオンライン授業があるような時間割の場合に、オンライン授業へリアルタイム出席を求めてしまうと、自宅との移動時間と重なって受講できない、あるいは大学内でオンライン受講できる環境が確保できない、といった問題が起こるからだろう。ただ、それではオンデマンド式の授業は「自宅での隙間時間に取り組むもの」という扱いにならざるを得ないのではないか。

たとえば、1日の中で1コマだけ教室授業、その前後はオンデマンド実施という時間割の場合を

考えてみる。通学時間も含め日中の大半の時間を使って学習に充てられるのは教室実施の1コマのみ、他のオンデマンドの授業は早朝か夜間、あるいは深夜や休日にこなすしかない。これでは、1コマのためだけに大学に行くのは「コスパが悪すぎる」と感じてしまいかねないだろう。

オンデマンド式には、授業に取り組む時間を学生が決められる自由はあるが、授業内容に関する質問には回答待ちの時間が生まれやすく、それを見越した学習計画を立てる必要がある。発表者が担当する授業ではPC関連のトラブル相談も多く、トラブルで困っているときにサポートが行えないと原因の究明も困難になり、受講生とのやりとりが長期化しやすい。もちろんその間は肝心の授業内容に取り組めないのだから、学習計画が破綻することもよくある。また、そもそも学習計画をきちんと立てられない、学習時間を十分に確保できていない学生は、質問の回答待ちをするような余裕もなく、提出物の締切間際に慌てて形だけ整えるような学習になりがちである。

オンデマンド式は、そもそも非同期（＝教師は受講生と時間を共有しないことが前提）の仕組みであるため、状況の把握と手立てを迅速に行うことが難しく、結果として学習成果も「学生が自分でうまく学んでくれる」ことへの依存度が高い。

### 4. コスパのよい学びという視点

以前のように授業を教室と強く紐付ける方針に戻せば、大学や教師が学生の学習に介入しやすくなるだろう。しかしそれでは「きちんとコスパよく学べる」学生は自由を奪われたと感じるはずである。学びのコスパにおける「パフォーマンス」とは何かを考えてもらうことも含め、学生には自ら学習をデザインするスキルを身につけてほしいと発表者は考える。

そのためには、大学全体として何が必要か。学生の限られた時間を浪費させない時間割編成にすること。学習ストラテジーはもちろん、時間やタスクの管理スキルの育成を大学全体で取り扱うこと。教師や学生の日常を支えるICTに対しても、活用と環境整備のサポートを強化すること。そうした取り組みを、今こそコロナ禍における暫定措置からの次の一手として、真剣に検討していくべきではないだろうか。